

## 月と紡いだ島ぬ道

沖縄県立那覇商業高等学校 二年 高橋 とわ

「ああ、なぜこの道を選んだのだろう？」

舞台の緞帳がゆっくり下りて、帰り道を歩く足が少し重かった。着物に沁みた汗が、ウチナーの夜風に冷やされていく。ふと夜空を見上げると、雲の合間からぽつかりと月が顔を出していた。懐かしさが胸に溶け込み、静かに心を満たす光。不思議と、その光が私の胸の奥を見透かしているように感じられた。その時だった。「なんで迷っているの？」と月が私に話しかけてきた。私は驚いて辺りを見回したけれど、誰もいない。声に出したわけでもない。でも、その言葉が確かに胸に響いて、絡まつていた想いがほどけるように和らいだ。「小さい頃から、ずっと頑張っているさー。お母さんに連れられて道場に通つて、小さな足で舞台を踏みしめていた。あの頃の君の目は、光でいっぱいだったよ。初めて舞台に立つた時のこと、まだ覚えている？」あの時の情景が、波のように押し寄せて一気に蘇った。白粉の匂い、自分より大きな紅型、舞台の明かりに照らされた私の顔は、少し大人びた表情だった。お客様の拍手に包まれて「踊るのって、楽しい」という、純粹な気持ちだけで心が満たされていた。

「でもね、踊りが“好き”ってだけじゃ続けられなくなる日もあるさ。君は、だんだん上手になってきた分、期待も責任も感じているわけさー。」月の言葉は、まるで心中を読んでいるみたいだった。

稽古では、師匠の目が鋭い。指先の角度、つま先の向き、目線の高さ。少しのズレでも「やり直し！」琉球舞踊の「型」は、ほんの少しの違いでガラッと印象が変わる、繊細な芸術の世界だ。分かってはいるけど、自分の未熟さに挫けそうな日もある。「本当は、もっと気楽な人生もあつたんじゃないかな？」そんな風に思つてしまふ夜も、沢山あつた……。月は私の沈黙をそつと包むように続けた。「月はね、いつも見てるよ。君が笑つた日も、泣いた日も、踊れんで悔しくて海に向かって弱音をこぼした夜も、ぜんぶ照らしてきたださ。」胸の奥が、ぎゅっと縮こまつた。忘れたフリをしていた日のことを、月はちゃんと覚えてくれていた。「月は、満ちたり欠けたりするさ。君の心も一緒よ。同じように、君の心にも“満ちる夜”と“欠ける夜”がある。でもね、大切なのは“光を失つていな”ということさ。雲に隠れて見えなくなつても、月は

ずっといるよ。」私は、その言葉にハッとした。そうか、私も同じだったのかもしない。上手に踊れなくても、自信を失っても、心の奥には、ずっと消えない光があった。踊りを辞めたくなった夜、寄り添ってくれる人もなく、不安だけが隣にいた。

でも、たとえ輝けていないと感じた夜でも、私はこの空の下に居続けたのだ。「君が過ごしてきた『月』たち。心の月も、カレンダーの月も、全部君を照らしてきた。十四年分、百六十八の月を、君はちゃんと積み重ねてきた。初めて地謡の音に合わせて踊った月。舞台袖で門下生と励まし合った月。どれもが、今の君を形づくりている。無駄な月なんて一つもなかった。」その言葉を聞いた瞬間、堪えていた涙が頬を伝った。舞台裏で悔しくて泣いた夜も、帰り道に一人で泣いた夜も、全てが今に繋がっていると、そう言ってもらえた気がした。月の光が、少しだけ強くなつたように見えた。「君の踊りにはうむい（想い）がある。琉球舞踊のうむいは、ただの型じゃない。それは心の深いところから滲む『うむい』であり、命の響きもある。君の踊りは、技術じゃない。光そのものなんだよ。」私は静かに深呼吸をした。この道に迷いが無かつたわけではない。でも踊るたび、誰かの心に少しでも何かが届くなら、それだけで意味がある気がした。月は最後にこう語った。「だから、もう一度自分のために踊ろう。評価や期待のためじゃなく、君自身の『うむい』を届けるために。それがこれから君の光になる。」私は月を見上げて、小さく頷いた。心がすっと軽くなるようだつた。誰にも話せなかつた弱さや迷いを、全部あの光が包んでくれた。「ありがとうね、月さん。誰にも言えなかつた気持ち、聞いてくれて……。」そして心の中で静かに誓つた。もう一度自分のために踊ろう。不安があつても、涙が出ても、私はこの道を選んで良かったと思いたい。自分の踊りを信じ切る「ウチナーワーク」を燃やそぐと。

舞台袖で深呼吸をして、そつと目を閉じる。胸の奥で高鳴る鼓動を落ち着かせるように。浮かんではくるのは、どんな時も見守ってくれた、あの優しい光。舞台の奥から三線の澄んだ音が、波のように寄せ返す。ひとつ、ふたつと、空気が少しづつ満ちていく。

今、緞帳がゆっくりと上がる。「もう怖くない。ここが君の居場所だ。」月に背中を押され、一步踏み出した。月と交わした約束が、島のうむいと重なり、私の挑戦へと広がつた。「私が纺ぐ道は、未来の道標」だから……。